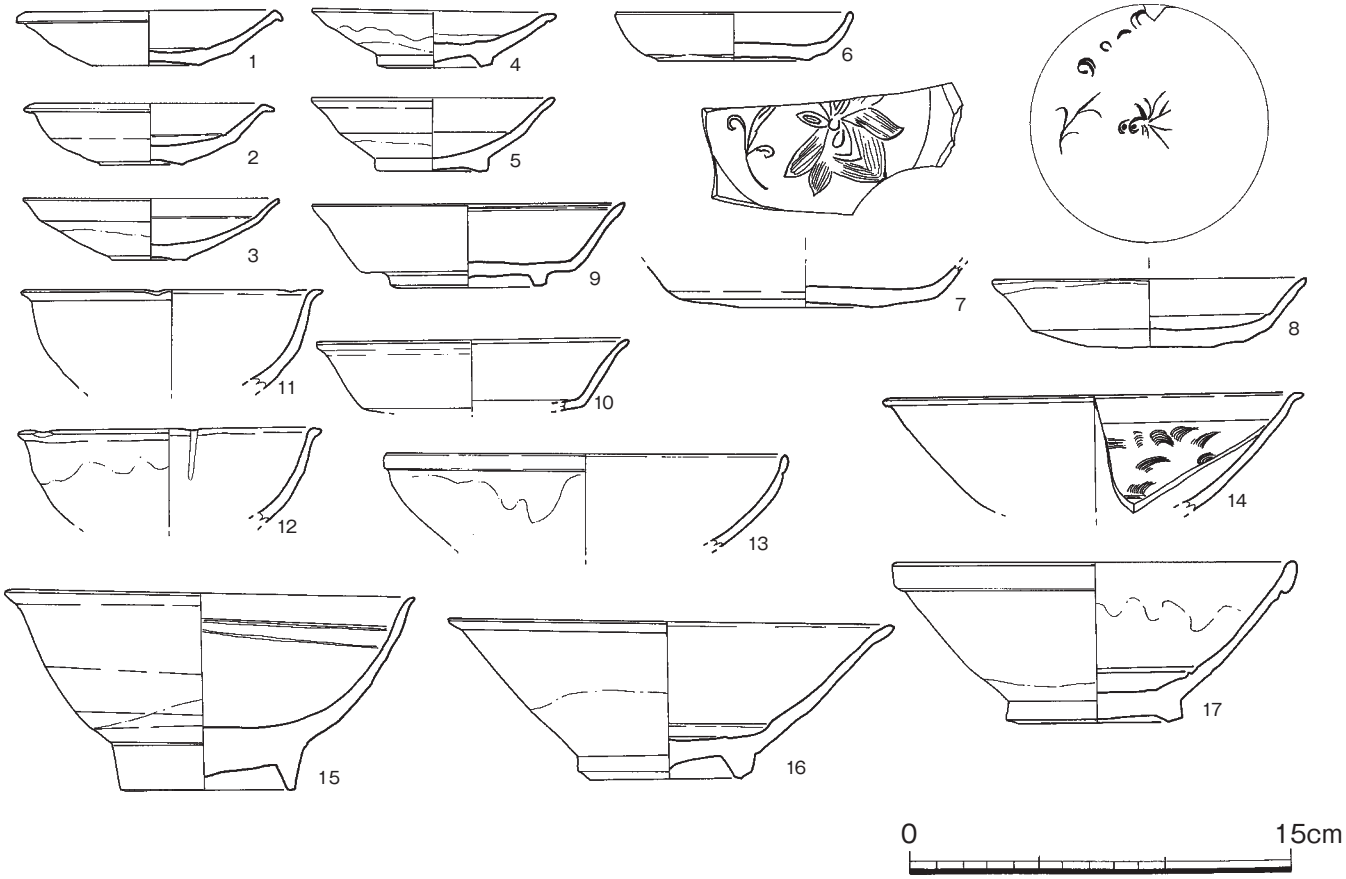
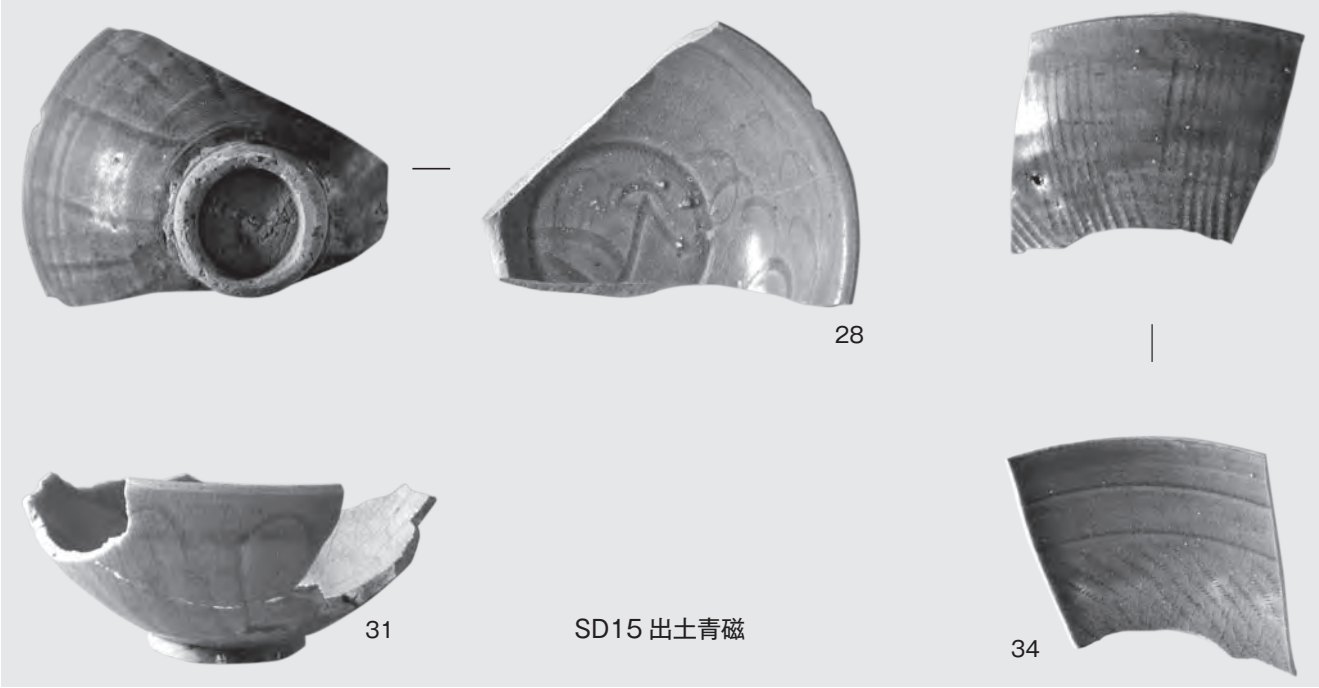


Fig.6　SD15 出土遺物実測図 1（白磁　1/3）



SD15 出土青磁

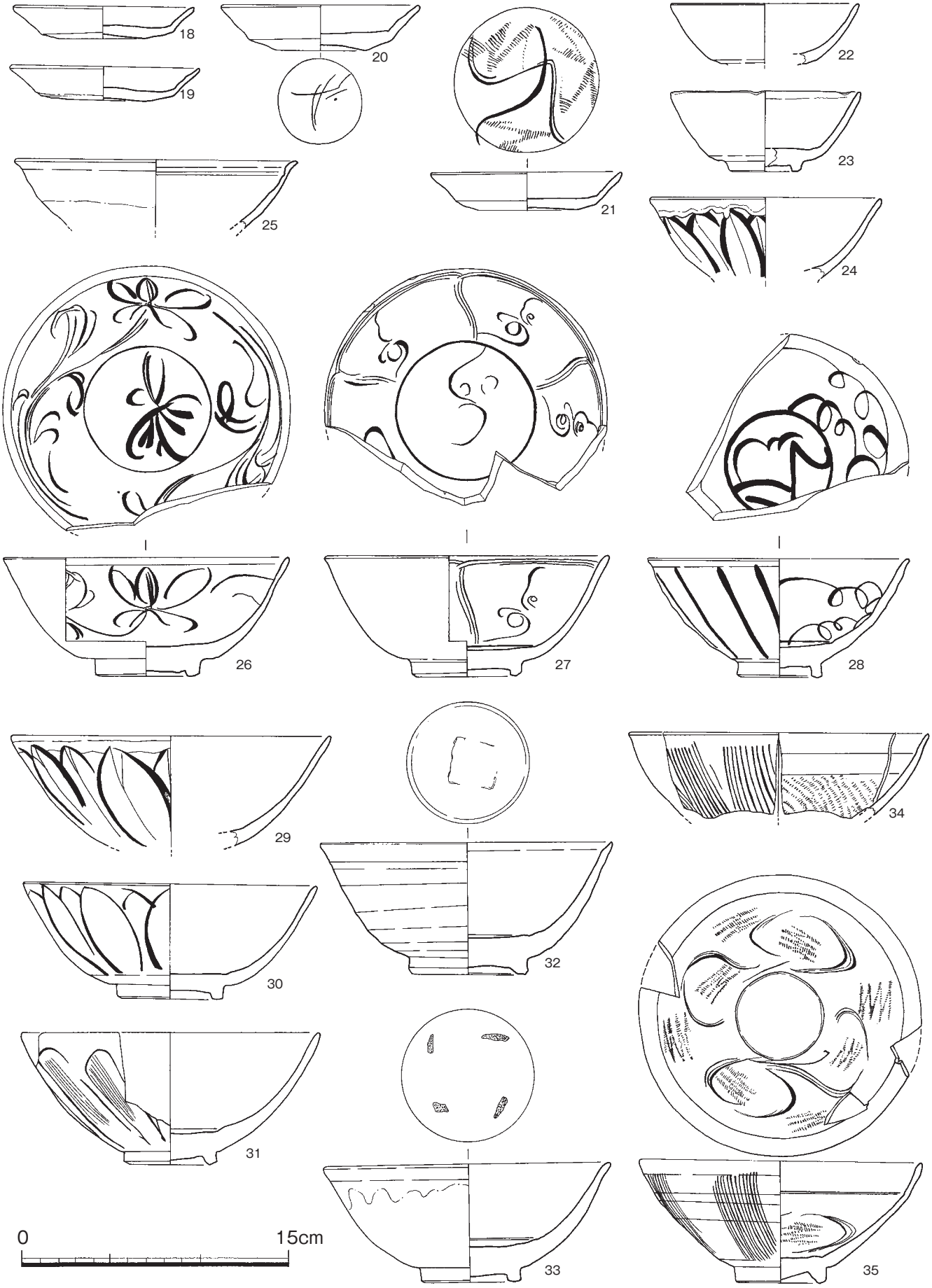


Fig.7　SD15 出土遺物実測図２（青磁　1/3）

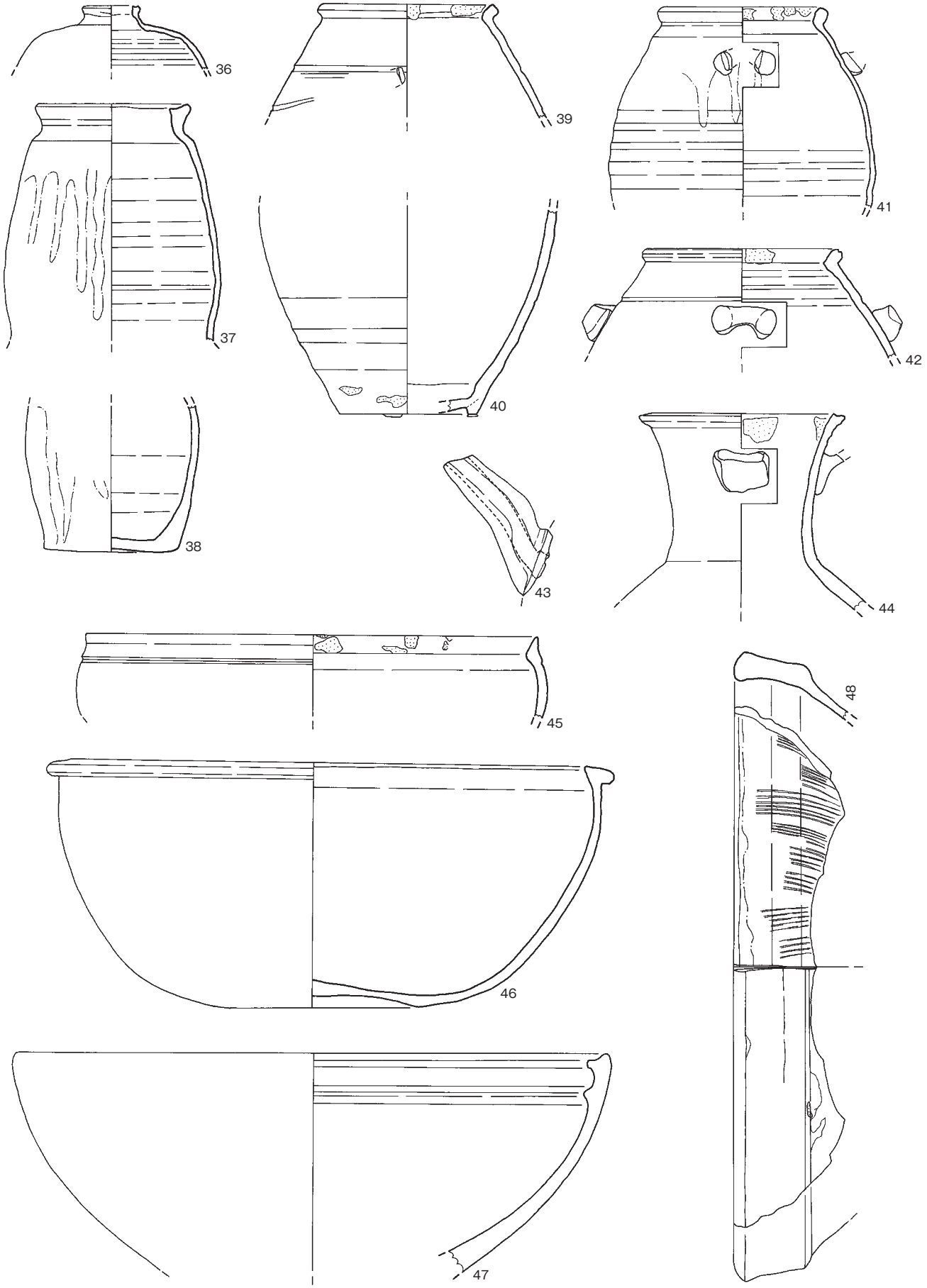
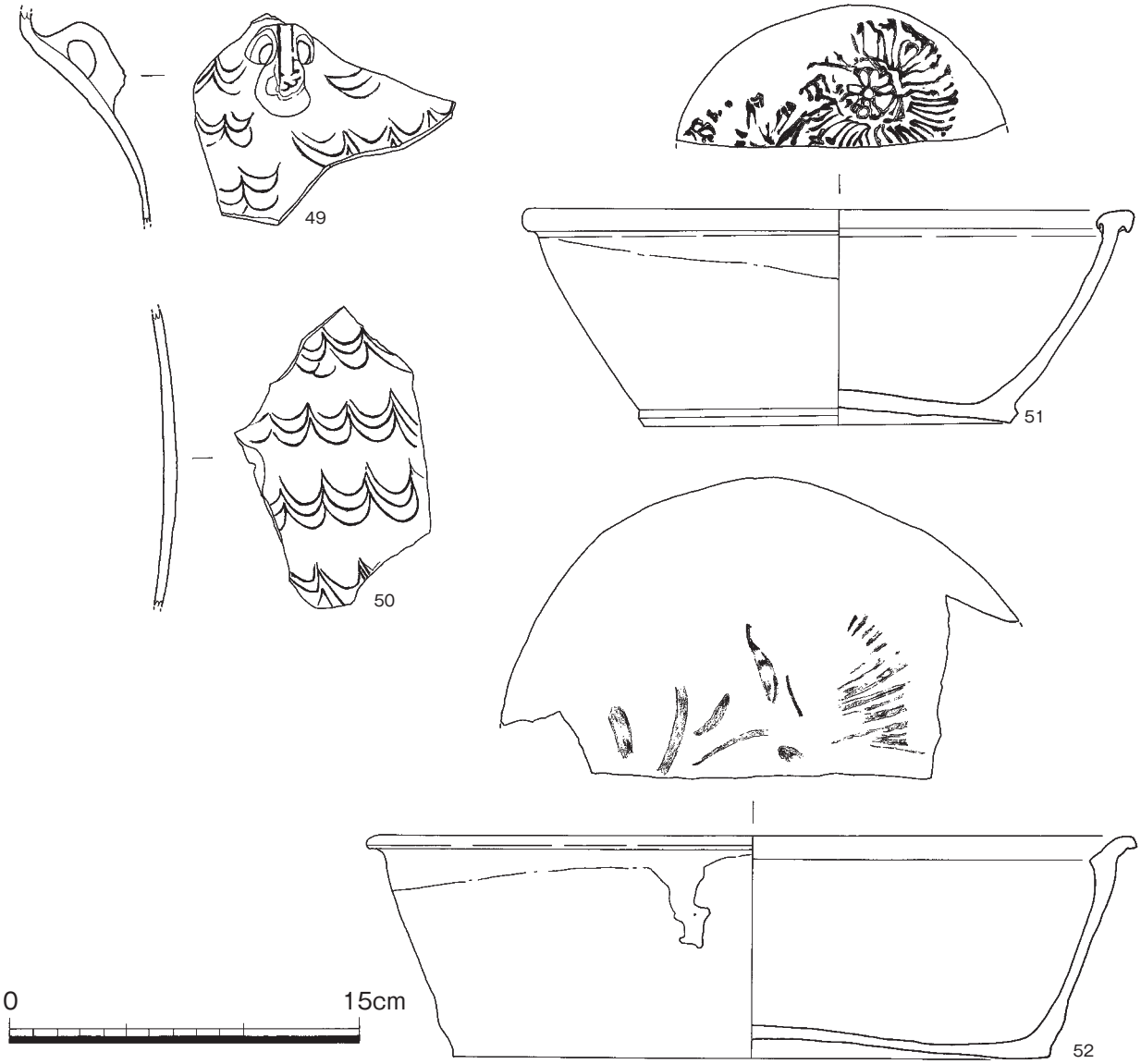


Fig.8　SD15 出土遺物実測図３（陶器　1/3）　0　15cm



49

51

Fig.9　SD15 出土遺物実測図４（陶器　1/3）

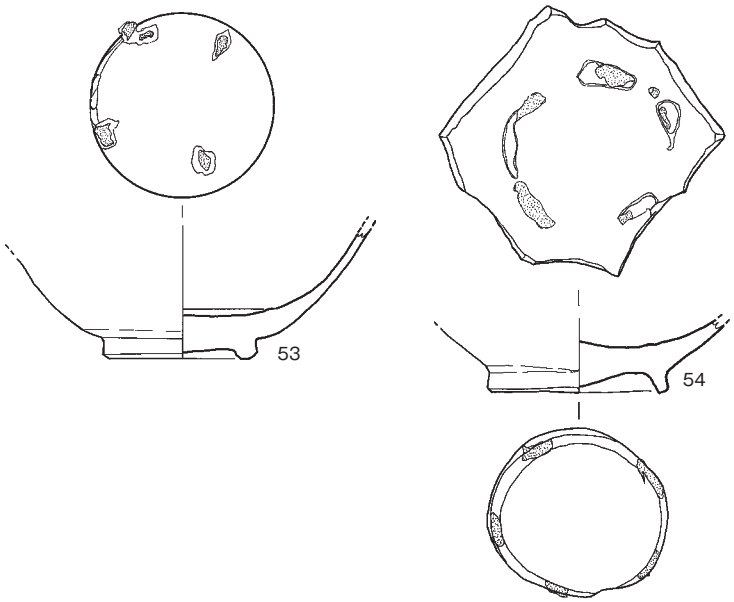


Fig.10　SD15 出土遺物実測図５（目跡が残る青磁　1/3）

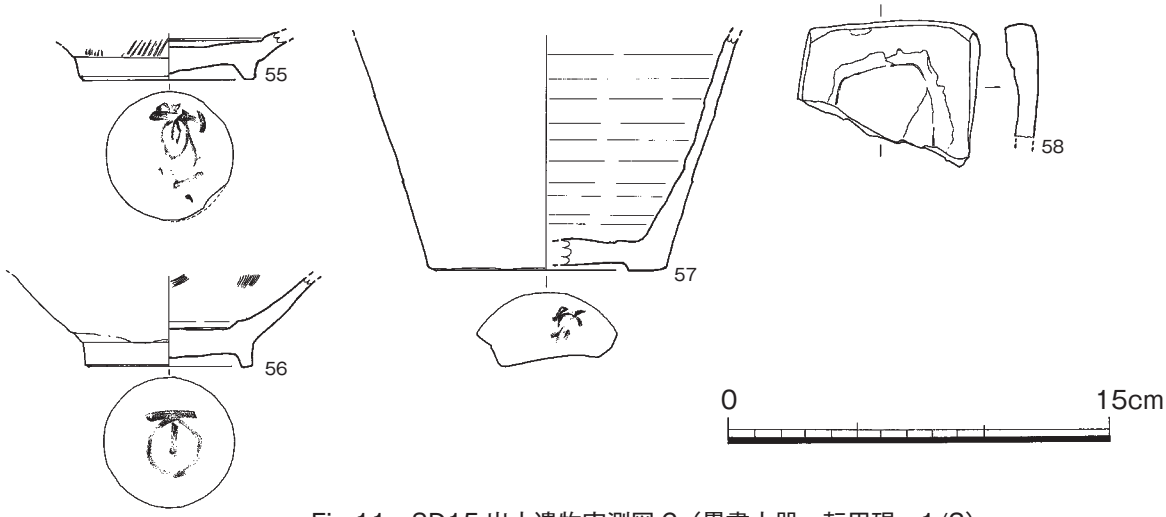


Fig.11　SD15 出土遺物実測図６（墨書土器・転用硯　1/3）

土師器皿（Fig.13）

66～75は底部ヘラ切り、他は糸切りである。66～74は底部に弯曲がみられる。

1類（66～70）

　底部はヘラ切りで弯曲する。底部の器壁が薄い。口径は9.4cm前後を測る。

2類（71～74）

　1類と近似するが、底部が厚い。口径は9.0～10.4cmまでばらつきがある。

3類（75）

　底部はヘラ切りであるが平坦である。底部の器壁も厚い。口径9.1cmを測る。

4類（76～78）

　糸切りの底部は平坦で器壁が厚い。口径8.0～8.4cmを測る。

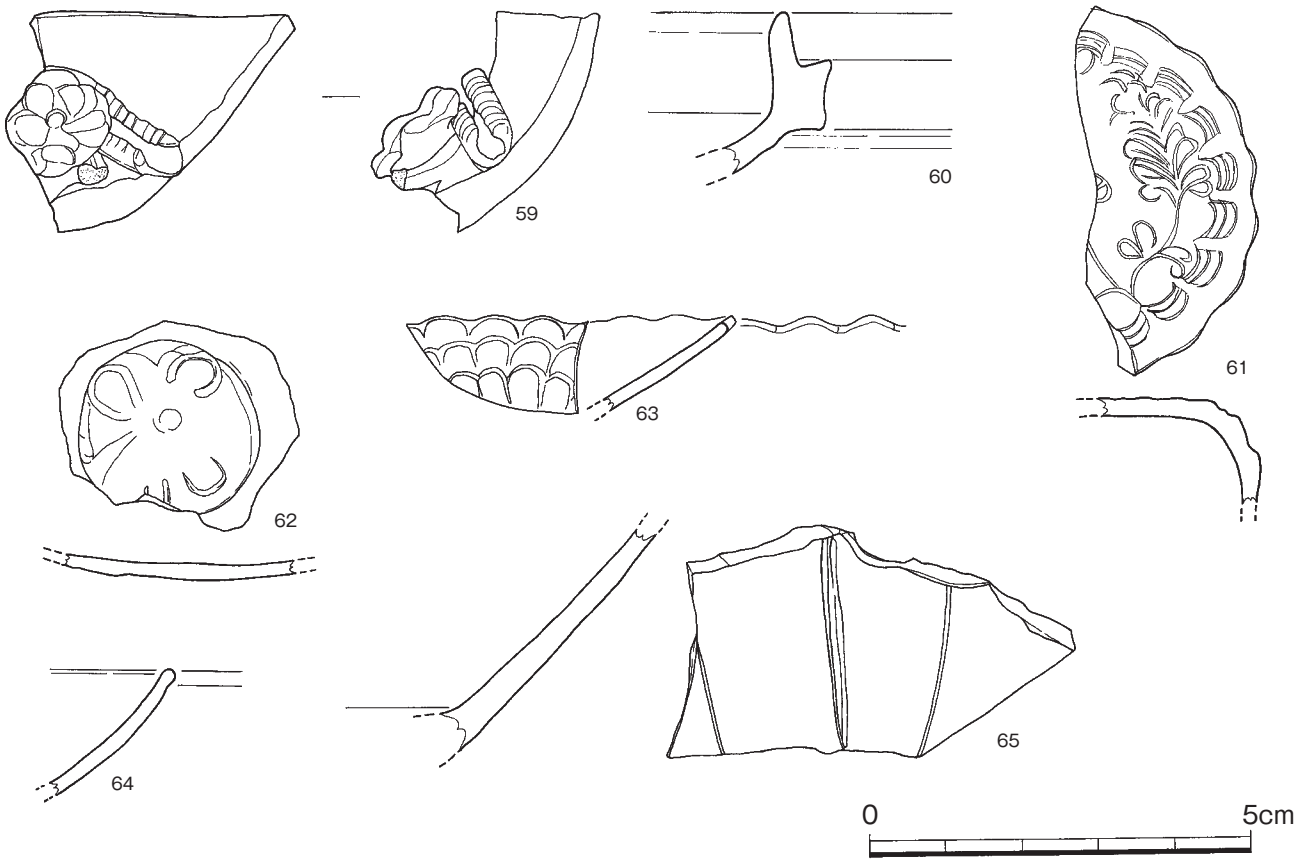


Fig.12　SD15 出土遺物実測図７（合子・青白磁・白磁小椀　1/1）

5類（79～84）

底部は糸切り。4類同様に底部は平坦で厚い。口径が大きくなり、8.8～9.8cmを測る。

6類（85、86）

底部は糸切り。歪が大きく形態が不明である。底部の器壁は比較的薄い。

7類（87～91）

糸切りの底部は上げ底となっている。底部の器壁は比較的薄い。体部が開いた87、88の口径が小さく8.4、8.6cmを測るが、89～91は9.3cm前後である。

8類（92～94）

糸切りの底部は平坦で厚い。体部も短い。93が最も新相を示す。口径8.7～9.3cmを測る。

土師器坏

1類（95～99）

体部の中位で弱く屈曲し、ヘラ切りの底部は丸底に近い。器壁は比較的薄い。98は口径が最も大きく16.2cmを測り、底部の弯曲が大きい。98以外の口径は15.6cm前後を測る。

2類（100～109）

体部と底部の境が明瞭となる。ヘラ切りの底部は弯曲が小さくなり、器壁が厚くなる。口径14.4～15.0cmを測る。

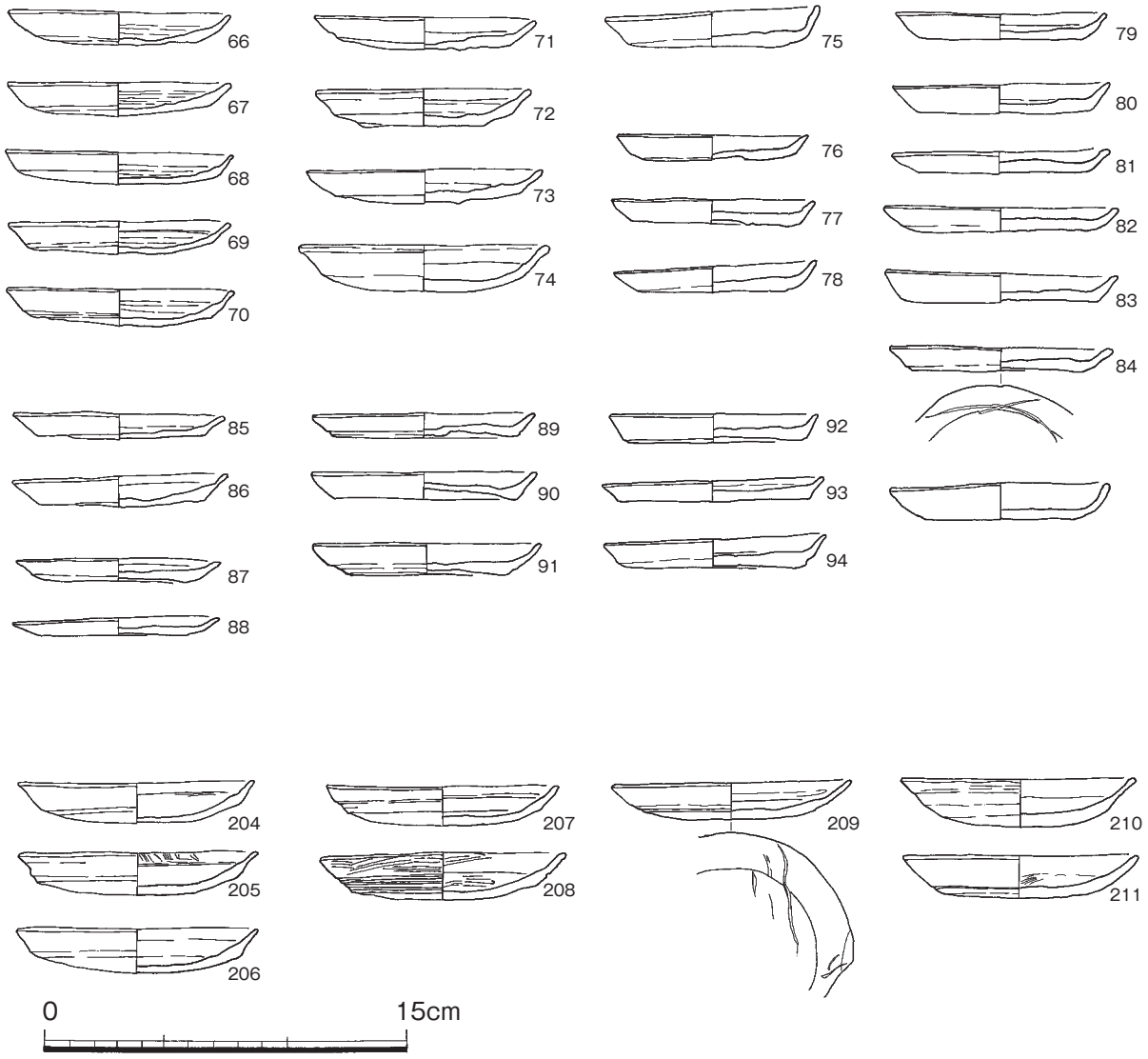


Fig.13　SD15 出土遺物実測図８（土師皿、瓦器小皿　1/3）

3類（110、111）

ヘラ切りの底部が平坦となる。110は口径14.6cmを測り、底部は厚い。111は口径15.0cmを測る。

4類（112～114）

ヘラ切りの底部はわずかに丸みがある。体部の器壁は薄く、均等な厚みで立ち上がる。

5類（115、116）

糸切りの底部から内弯した体部が立ち上がる。口径16.0cm前後を測る。

6類（117～119）

糸切りの平坦な底部から直線的に開いた体部が延びる。口径14.8～15.9cmを測る。

7類（120）

器高が高く、糸切りの底部は小さい。口径15.6cm、底径8.4cm、器高4.0cmを測る。

瓦器小皿

1類（204～209）

体部中位で屈曲し、丸底に移行する。口径10.0cm前後、器高1.5～2.0cmを測る。

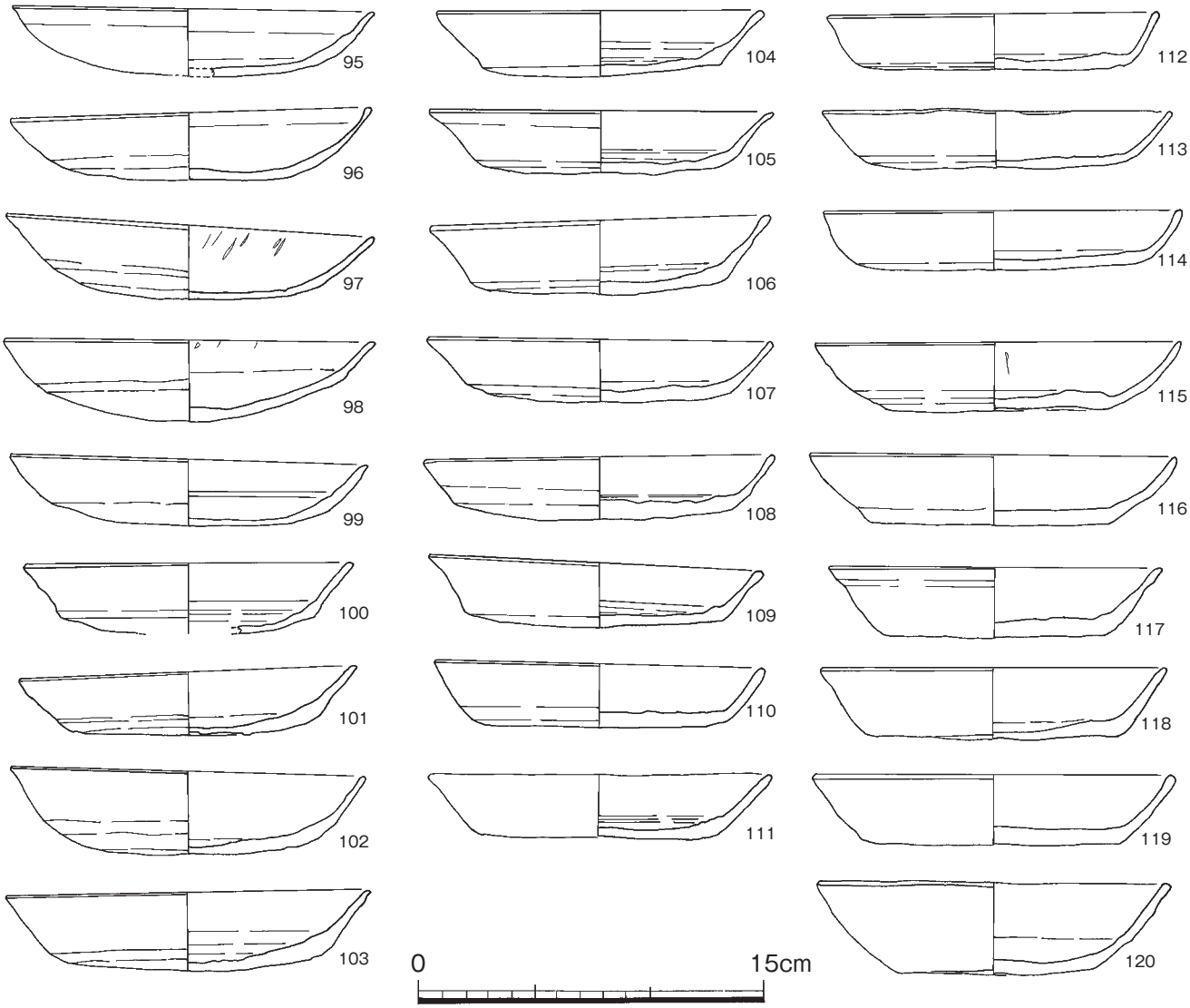


Fig.14　SD15 出土遺物実測図９（土師器　坏　1/3）

2類（210、211）

体部の屈曲が弱く、底部が平底に近くなる。口径も1類に比べ小さくなり、9.7cm前後となる。

瓦器椀

1類（121～132）

底部が丸く、体部の開きが小さい。129の口径17.6cmを除くと口径16.0～16.6cmに収まる。高台を入れない椀部の器高は5.2～5.4cmを測り、口径に対して深い感じを受ける。

2類（133～141）

底部が丸く、体部の中位に弱い屈曲を有す。135の口径15.3cmを除くと口径16.6～17.2cmに収まり、1類より大きい。椀部器高は4.8～5.3cmを測り、1類より浅い。

3類（142～153）

底部の丸みが無くなり、中心付近が水平となる。そのため、口径に対して低平となる。

a.（142～147）底部の弯曲や器高が2類に近い。口径は142、143が16.0cm前後であるが、他は17.0cmを超える。

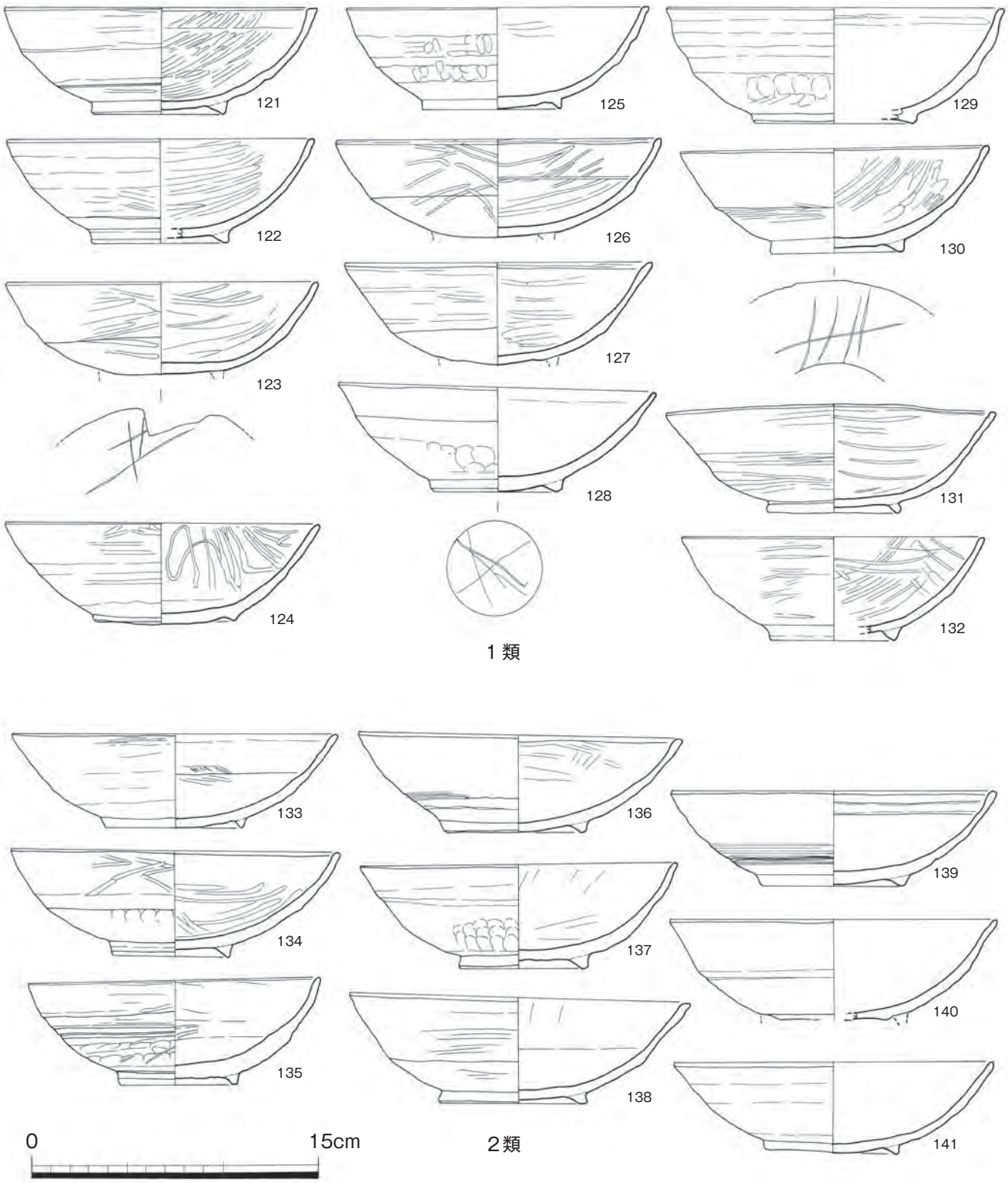


Fig.15　SD15 出土遺物実測図 10（瓦器　椀　1/3）

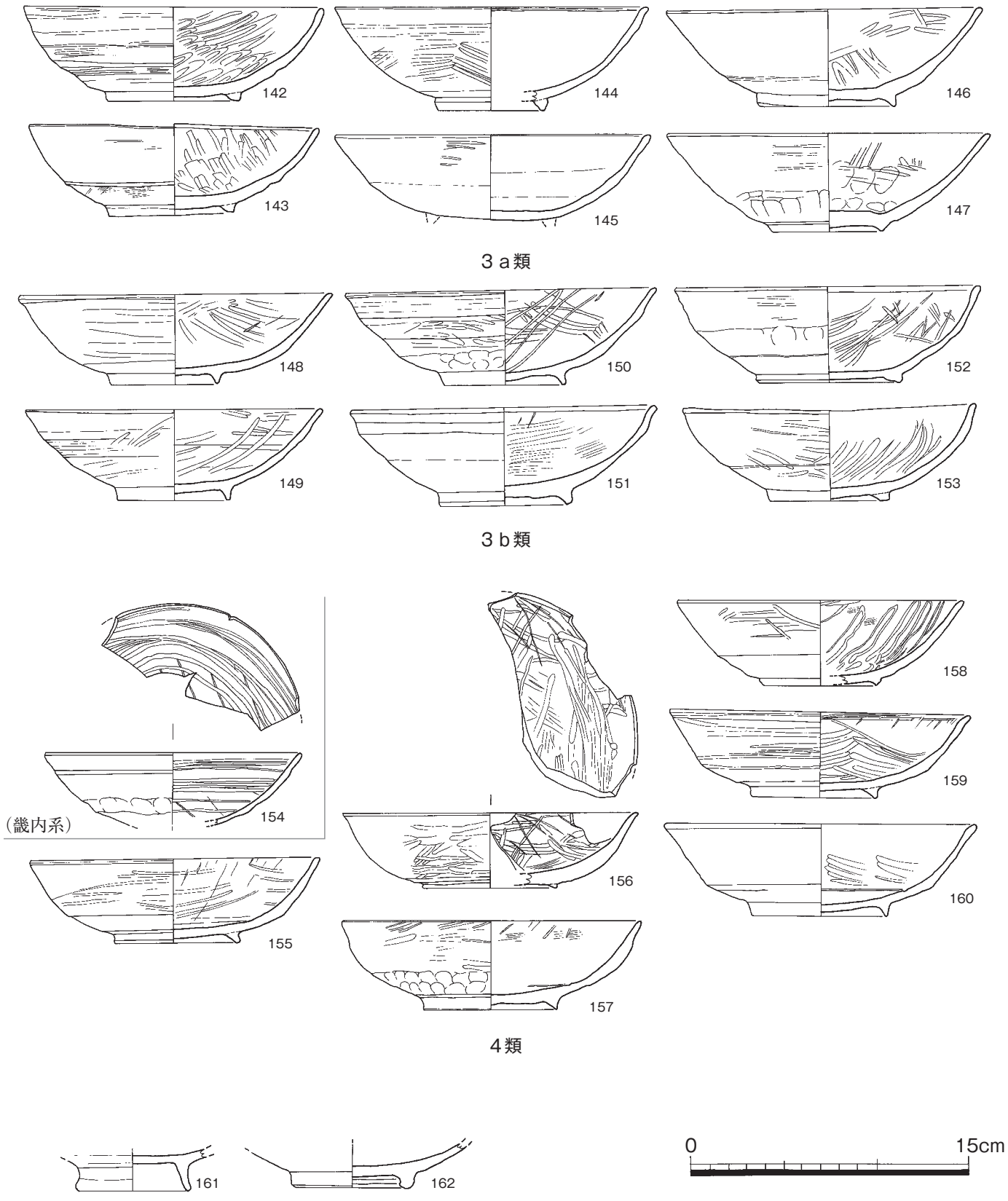


Fig.16　SD15 出土遺物実測図 11（瓦器　椀　1/3）

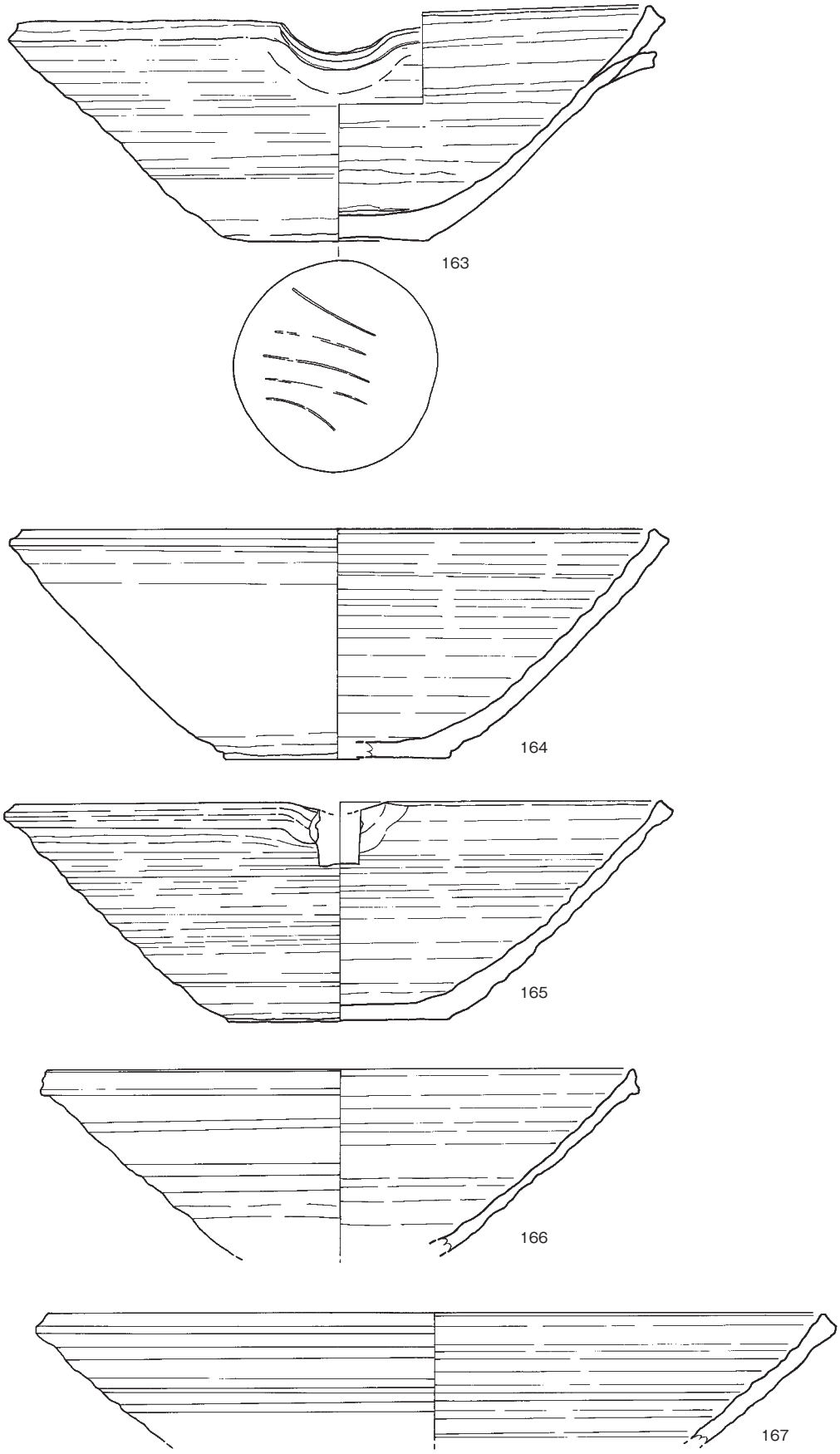


Fig.17　SD15 出土遺物実測図 12（須恵質　捏鉢　1/3）

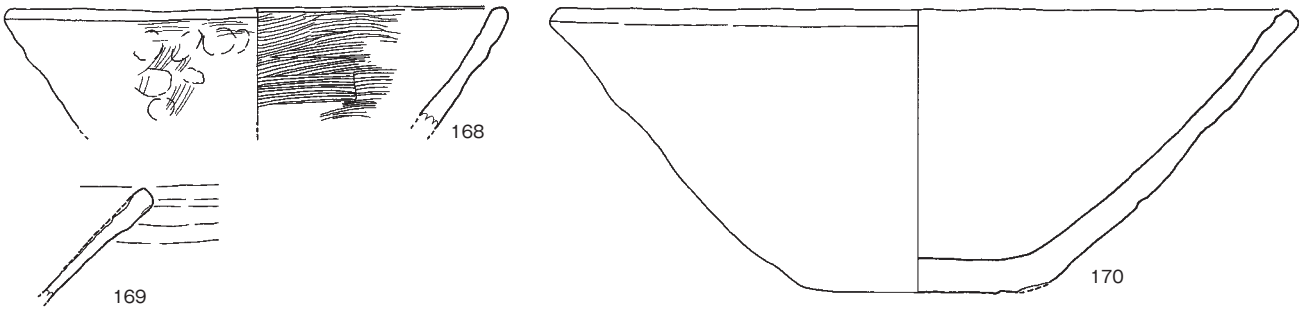


Fig.18　SD15 出土遺物実測図 13（土師質　捏鉢　1/3）

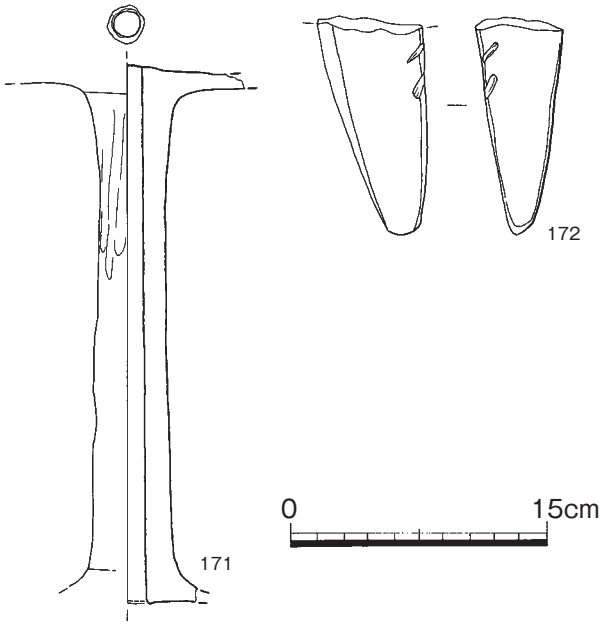


Fig.19　SD15 出土遺物実測図 14（土師質　器台、支脚　1/3）

b.（148～153）体部中位から上位に弱い屈曲を有し4類に近い。椀部の器高が4.4～5.0cmと低くなる。口径は15.9～17.2cmを測る。

4類（155～160）

坏に近い浅椀の器形である。体部との境で屈曲した底部は緩く弯曲しながら中心へ下がる。155～157は近似した器形で、体部下位から器壁が厚くなる。椀部の器高は低く、4.1～4.5cmに収まる。156の高台は小さく退化している。159、160は器壁が薄く、体部が直線的に開いていく。158は3類に近いが高台が小さく退化している。

畿内系（154）

154は銀化し、器壁が薄く他と異にする。内面のミガキは横位の平行線状に隙間多く回る。そのミガキに切られた3本の平行した線刻がみられる。

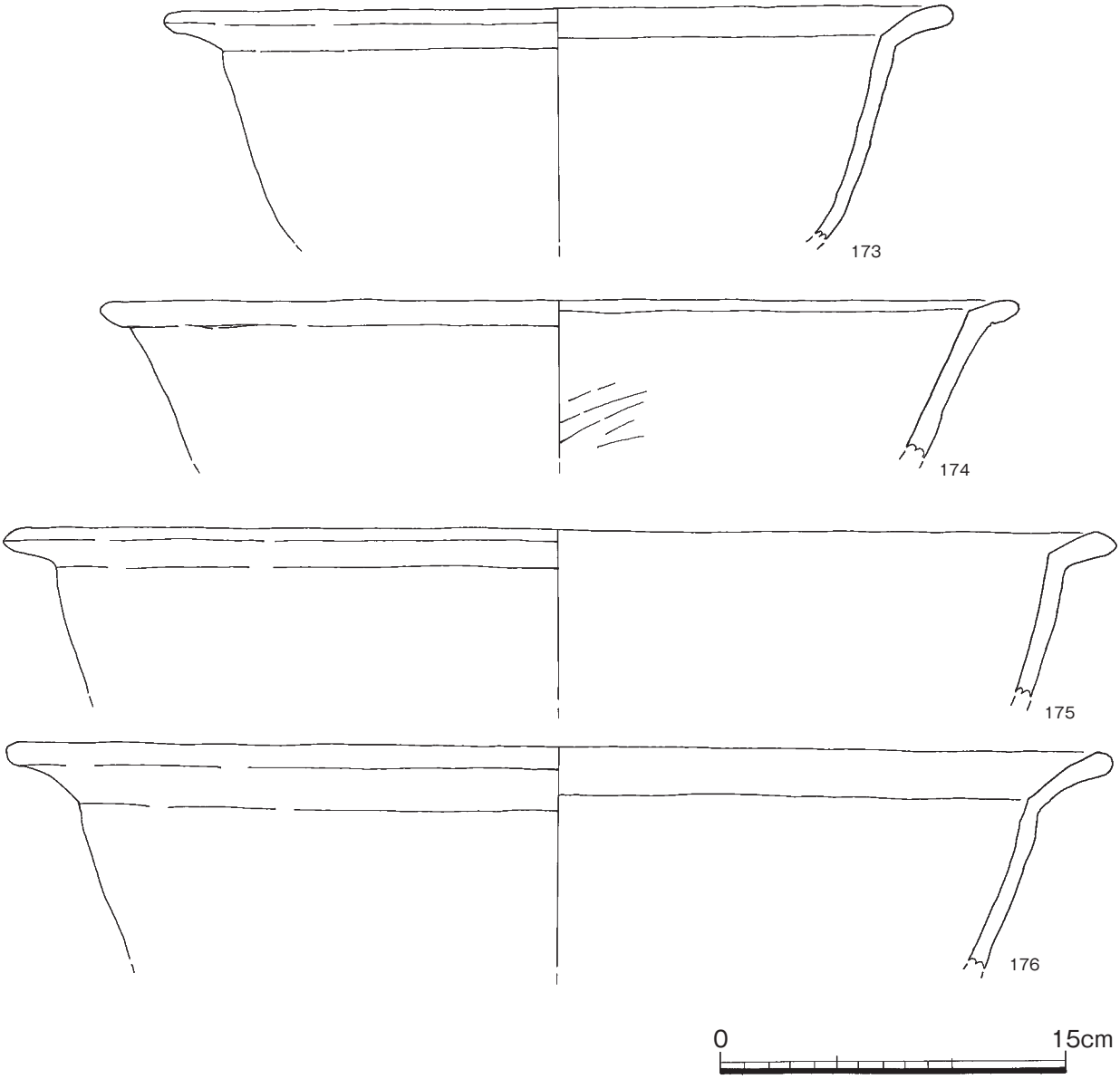


Fig.20　SD15 出土遺物実測図 15（土師質　鍋　1/3）

黒色土器・瓦器(161、162)

161は黒色土器、162の瓦器椀高台は断面方形状を呈す。他にこの時期の遺物は少ない。

須恵質捏鉢(Fig.17　163～167)

東播系捏鉢と思われる。166が最も時期が降り第2期第2段階(12世紀末～13世紀初頭）とみられる。他は第1期第2段階～第2期第2段階の12世紀前半代に置かれるものと思われる。

瓦質・土師質鉢(Fig.18　168～170)

168、169は瓦質、170は土師質である。火熱を受けている。

土師質製品(Fig.19　171、172)

171は土師質の器台、172は土製支脚と思われる。火熱を受け脆い。胎土にスサを含む。

土師質鍋

1類　口縁部が「く」の字に折れるもの

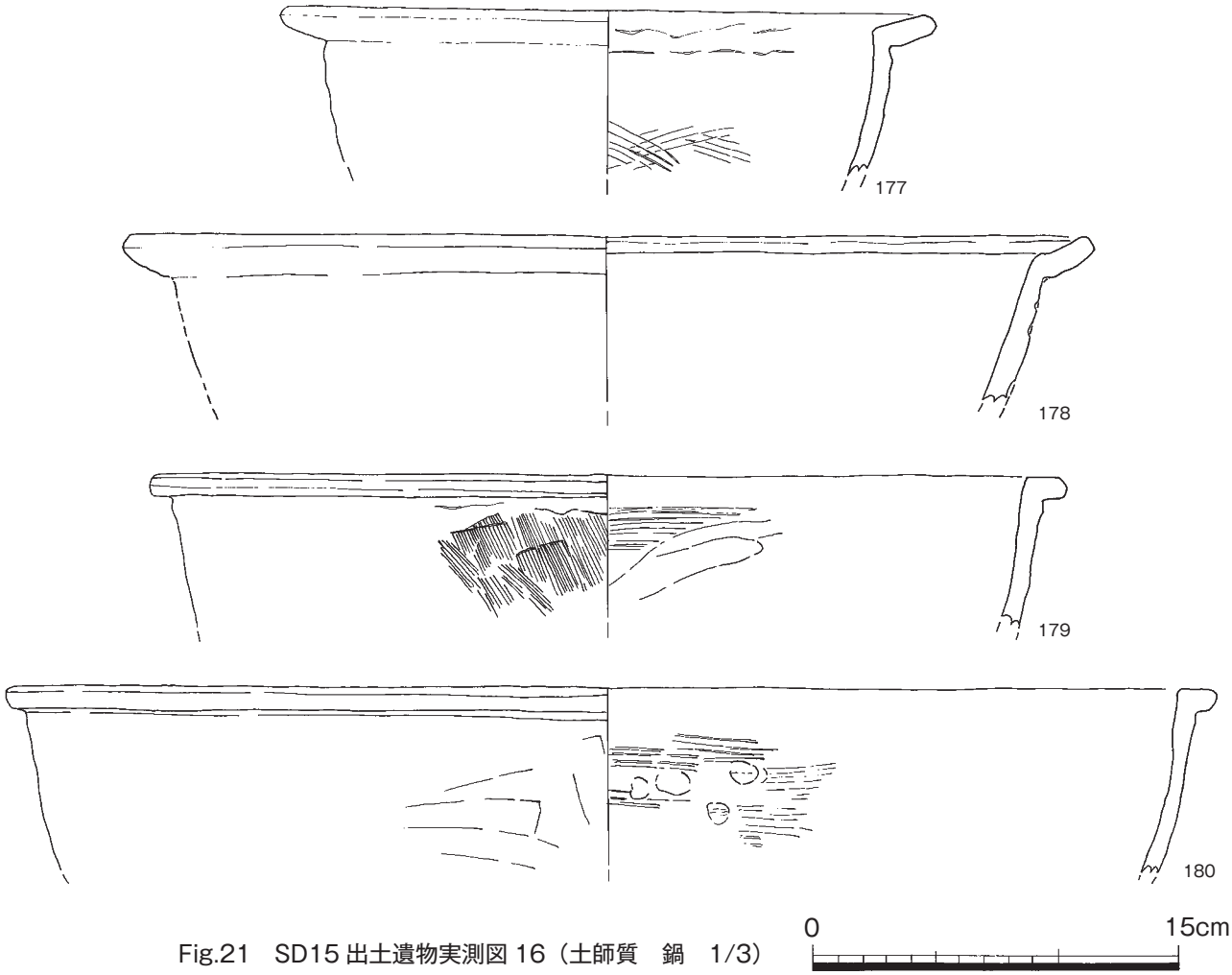


Fig.21　SD15 出土遺物実測図 16（土師質　鍋　1/3）

a.　口縁部が外弯しながら長く延びるもの（173、176）

b.　口縁部が短く直線的に延びるもの（174、175、177、178）

2 類　口縁部が外側へ水平に張り出し、体部の開きが小さいもの

a.　口縁部が短く張り出し、端部が面取りに近い。（179、180）

b.　口縁端部は丸く収められ、その上面に縄目の圧痕が付く。「肥前系」と称される。（181 ～ 183）

3 類　金属器を模倣した口縁部である。

a.　クランク状に折れ曲った口縁部である。胎土が細かく密である。畿内系搬入品とみられる。（184）

b.　内弯した口縁部である。（185、186）

4 類　（189）断面三角形状の短い口縁部を呈し、器厚で内弯した椀形の体部である。火熱を受け、内面は荒れている。

5 類　（187、188）浅く焙烙に近い。

187 は火熱を受け、煤が付着している。内面に線刻状の擦痕がみられる。188 は平底で指押痕が著しい。火熱は受けず、内面はあれていない。

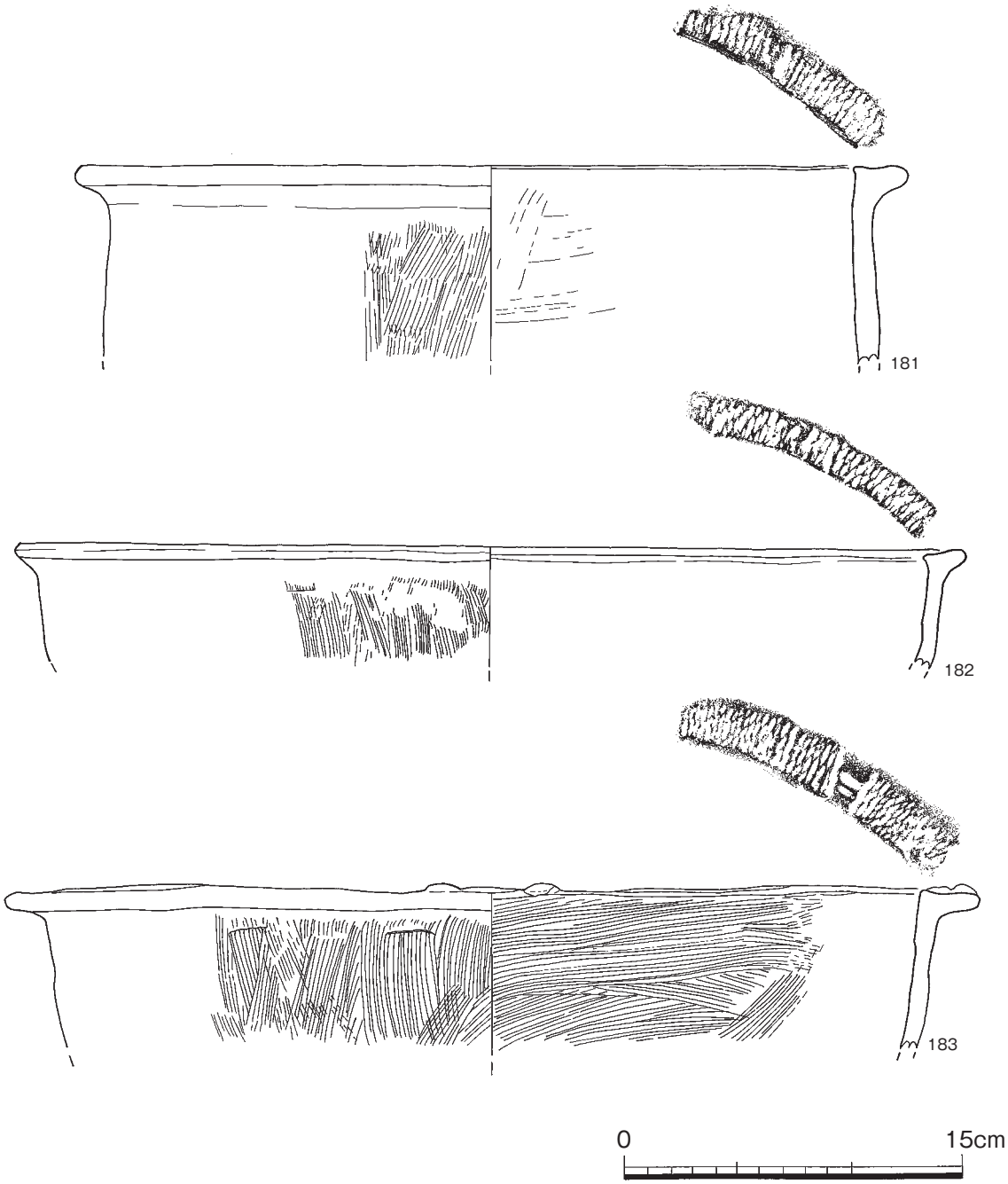


Fig.22　SD15 出土遺物実測図 17（土師質　鍋　1/3）

石鍋

1 類（190 ～ 193）

鍔がめぐるもの。12 世紀初頭を境に 2 類の方形取手から鍔に変化すると言われている。体部が内弯し、鍔の端部が面取りされているもの（190、193）、体部が直に近く、鍔の端部が細くなり面取りされているもの（192）、体部から口縁にかけて開き、鍔端部は丸みがあるもの（191）に分かれる。

2 類（194 ～ 198）

縦形の方形取手が付くもの。大きさから小（194 ～ 195）、中（197）、大（198）の 3 種がある。器形からは体部が内弯するもの（196、198）、体部の内弯が小さいもの（195、197）、体部が弯曲せずやや開くもの